

鳳凰網健康

ピークを越えて：呼吸器疾患の影響下にある医療と病院

凤凰网健康 health.ifeng.com 2024-02-02 11:39:29 来源：北京市

「ここには 20 人以上の患者がいるのに、どうして仕事を休めるのでしょうか？」

冬の夜の 11 時、東南大学附属中大医院の江北院区（宮本注：以下『キャンパス』）では、救急医の范志偉医師は仕事から帰る途中で立ち往生していた。彼を阻んでいたのはある高齢患者だった。その老人は、樊志偉医師がその日は日勤で、すでに午前 8 時から午後 11 時まで残業していたことを知らなかった。このとき、范志偉医師は翌日も日勤が待っていたため、なるべく早く食事をして寝なければならなかったのだ。

ひとしきり説明された後、老人は范志偉医師を「解放」してくれた。だが、そのような焦慮と不理解は、過去 6 か月間、樊志偉医師の診療所では頻繁に見られた。2023 年 9 月以降、マイコプラズマ肺炎やインフルエンザ A 型、インフルエンザ B 型、RS ウイルス、新型コロナウイルスなどの呼吸器疾患類が発生し、各地区の病院や患者は次々と感染のピークを経験している。この「ピークを越え」た経験を振り返ってみると、医療従事者が模索し続け蓄積した対処法と、より注意を要する細かい問題の両方があることがわかる。凤凰网健康は、より理解すべく各地の救急外来や小児科、呼吸器科、感染症科室の最前線の専門家に独占インタビューを試みた。

「2023 年の 9 月頃、周囲の同僚が肺炎に感染しました。我々はこれがマイコプラズマによるものとすぐにわかりました。今回の波は荒々しく到来しましたが、およそ 10 月末から 11 月中旬にはピークに達した後に発生率が低下しました。その後には、インフルエンザが再び襲って来たのです。この数か月で私たちの仕事量は、3～5 倍に劇増していました。」

范志偉医師は凤凰网健康記者に対し、「ピークを越え」た期間中は 1 日に最大約 150 人を治療しないとならず、平均 5 分に 1 人の診察をしなければならなかったと語る。「日勤で働くと、普通夜遅くまで残業しないとなりません。私たちがそこに座っていると、患者を診れば見る程増えてくるように感じられ、決して終わりがこないのです。」

患者数は少なくなかったが、処理の負担は大きくなかった。なぜなら、2020 年から 2022 年にかけての COVID-19 予防・管理に比べると、業務量が大幅に削減されているからだ。更に、マイコプラズマ肺炎感染症やインフルエンザによる重症化は少なく、対処も難しくはないからだ。范志偉医師にとっては、2023 年のインフルエンザのピークへの対処というプレッシャーは、2018 年の際の比ではなかった。「その年、『インフルエンザ下の北京中年』という記事が大人気になりました。当時、オセルタミビルはどこも在庫切れで、揚州出身の友人が一晩かけて南京に車で向かい購入してくれました。しかし、ここでも並ばなければならず、長時間並んでも無かったということもありました。」

しかし、ピークを越えた今回、范志偉医師の気分が 2018 年より悪かったのは、彼のいる外来救急患者たちがほぼ毎日口論をしていたからだ。「そう、医師や看護師間の喧嘩ではなく、患者同士の口論だったのです。今は感染に特段の不安を感じる人もいるようで、以前よりもパニックの度合いが高まっています。（彼らは）自分こそが一番深刻であり誰より早く治療されるべきだと常々思っているのです、衝突や争いを生じやすいのです。2018 年もインフルエンザの患者さんがかなり出ていましたが、皆さん風邪や発熱程度に扱っていたので、だいぶ落ち着いたものでした。」

范志偉医師は凤凰网健康に対し、これは一方では患者の焦慮を反映しており；他方では、救急スタッフの数が確実に不足していることも反映していると分析している。あるメディアは、上海では救急医が 3 分の 1 も不足していると報じている。発展途上の地区では、救急医不足はさらに深刻だ。范志偉医師は、医療経験を向上させるために、各病院はその能力の範囲内で工程の最適化を図り、インターネット・ツールを上手く活用し、患者の待ち時間短縮を図らねばならないと付け加えた。

「当然、救急外来の役割を理解していない人はまだたくさんいます。救急外来の急とは、いったい病状が危機的なのか、命が危機的なのか、或いは気分や時間も急を要するものなのか？多くの人はこの問題について考えてはいません。」

救急外来のピークのキーワードが「焦慮」なら、小児科のキーワードはもしかすると「爆発」かもしれない。**2023**年のマイコプラズマ肺炎およびインフルエンザの流行段階においては、子ども患者が爆発的に増え、家長たちは極度の不安を抱え、医師や看護師が爆発（＝多忙を極めたこと）した。

華中地区の旗艦小児科である華中科技大学同済医学院附属同済医院小児科を例に挙げると、同科の一日あたり外来患者数は約**2,500**人だが、しかし、**2023**年**3**月のインフルエンザ流行期と同年後半のマイコプラズマ肺炎流行期では、その数は一気に**3,600**人以上と**50%**近く急増した。

「各業務単位の医師が**120**人の子供を治療するというのは通常のことですね。非常に多くの同僚が、朝**8**時から夕方**6**時まで集中的に働き、午後**6**時から午後**9**時まで時間外残業をしているので、自分の子供が病気のときに家族に世話を任せるしかありません。」

華中科技大学同済医学院附属の同済病院小児科で部長、同済児童病院で院長をしている羅小平医師は鳳凰網健康に対し、呼吸器疾患の発生率が高い時期には、一般外来や残業外来、夜間及び休日専門外来、小児呼吸器専門外来を追加で開設していると語った。同時に、救急医師や一般診療医師を増員し、インターネットによるオンライン診療を積極的に推進し、保護者への携帯電話によるセルフ請求促進などにより、待ち時間の削減など、医療の待ち時間短縮を図っている。これらの多目的転換により、同済小児科の**2023**年救急部門は前の年より大幅に改善され、かつてのような「**12**時間以上並ぶ」ということもなくなり、ピーク時の夜間救急でも、平均待ち時間はわずか**1~2**時間となった。だが、「ピーク越え」期間全体を通して小児科医は実際に不足しており、それがこの科の急速な「ピーク越え」を制限する最も重要な要素となっているのだ。

羅小平医師は小児科医の給与は総じて低く、小児患者は自分を正確には表現できない。入院や健康診断の際にも手間がかかり複雑であり、一部の親の不安感やコミュニケーションの難しさに加え、医師の勤務時間中に精神的、肉体的に大きなプレッシャーにさらされるので、小児科は人材にとって魅力的ではなく、人材の維持が難しいと紹介している。

医療業界における「小児科医不足」は今に始まったことではないのだ。国家統計局のデータによると、**2022**年の我が国における小児科医数は**22**万**6,000**人であるが、同時期の**0**歳から**14**歳までの児童数は**2**億**3900**万人だが、これは子供**1000**人に対して**1**人しか小児科医がいないということになる。同時に、小児科を躊躇する医学生も増えている。「**2022**年の調査によると、医学系の大学受験志願者の人気ランキングでは、臨床医学が人気値**648**万**7,000**点でトップとなったのに対し、小児科のそれは**26**万**9,000**点で最下位となった。」

羅小平医師は、**2023**年に呼吸器疾患が大流行したことで、多くの人々が小児科医の懸命の努力に再び注目することになるだろうと率直に述べている。しかし、十分な訓練を受けた小児科医にとっては、これは実際に通常の作業状態であり、アデノウイルスやインフルエンザ、ロタウイルス、**RS**ウイルスなどを含む各種疾病のピークは毎年起こりうるのだが、小児科医にとっては疾病のピークを歓迎するのは通常のことであり、「ピーク越え」もまた難しいことではなく、数回分のシフト追加で終わることができる。「私たちも、親御さんや社会が小児科医に対してもっと理解と忍耐を与えてくれるといいなと望んでいます。私たちは残業で疲れているわけではありませんが、逆に家長の努力と心配りの言葉に感動してしまい涙を流すのです。」

羅小平医師は、季節性の感染症がまたやって来るだろうから、管理機構は政策の優先度を強化し、小児科医療スタッフの給与と福利厚生を確保し、より多くの優秀な人材を小児科に参加させて小児科に従事させる必要があると示唆するとともに；総合病院を訪れるプレッシャーを分かち合うため、末端医師たちの小児科能力研修を強化するという。

「気管支鏡検査が漸く終わった。今夜私たちが治療した子供の母親は、**PICU**で他の子供たちの治療も行っているところだ。」**2023**年**11**月**14**日午後**9**時頃、北京清華長庚医院の呼吸器・救命救急科部長の牟向東医師は友人たちに投稿した。**10**月のマイコプラズマ肺炎勃発以来、毎晩**9**時、場合によっては**10**時に気管支肺胞洗浄術を行うことが、彼と彼のチームにとっての日課となった。時折、牟向東医師は友人たちのサークルの中で嘆息せずにはいられなかった：「本当に気管支肺炎が多すぎるんだよねあ！」。

呼吸器疾患はクラスターの形で非常に蔓延しているが、外来救急と小児科が矢面に立たされており、次いで呼吸器科と感染症科がこれに僅差で続き、重傷者の救急治療の最前線における根幹となっている。「**2023**年**7**月の外来患者数はまだ**4,900**人でしたが、**10**月には**5,600**人に達し、その後の**11**月と**12**月には約**6,500**人という高水準で推移していました。患者数が増加するにつれ、私たちの勤務時間も長くなり、基本的に午前中の外来診療は午後**1**時半にならないと終わらず、その後、さらに肺胞洗浄を**6~7**件行い、あと病棟事務をこなして病院を出られるのは夜の**10**時過ぎになってしまいました。」

牟向东醫師は鳳凰網健康に対し、マイコプラズマ肺炎にしても **A 型**や **B 型**のインフルエンザにしても業界では新しいものではないと語る。**COVID-19**の流行という試練に耐えてきた医療チームは、この種の病気に対処するという大きなプレッシャーに晒されているわけではない。重症治療の重要な戦力として、呼吸器科はより専門的な知識と技術で医療をサポートせねばならない。「例えば、最近注目されているマイコプラズマ肺炎の特徴は、低年齢の児童が罹患しやすく、症状は比較的重くなりやすいのですが、薬剤耐性があるため、薬物治療の効果には限界があるということです。重症の子供は、鑄型気管支炎や気管支拡張症、無気肺、広範囲の肺硬化およびネクロシスなどの合併症を偶然発症することがあり、重篤な場合には命を脅かす恐れがあります。そのような子供には、一般に「肺洗浄」として知られる気管支肺胞洗浄治療が大変効果的です。清華長庚記念病院は、一般的な「半麻酔下での気管支肺胞洗浄」という方法に基づき全身麻酔洗浄を開発したのですが、洗浄の効果も患者の協力度も高く、治療効果が非常に優れています。この病気は狂暴です。私たちは、医療の重労働に集中するより技術と病気で患者さんがこの戦いに打ち勝てるよう手助けすべきだろうと考えています。」

2023 年 10 月末には、牟向东醫師が、『小児の重症マイコプラズマ肺炎治療における気管支肺胞洗浄に関する簡潔な臨床の建議書』を提出していたが、彼の開発した「全身麻酔下での気管支肺胞洗浄」という技法も、北京における小児の重症マイコプラズマ肺炎治療の重要な支援となっている。

2023 年 12 月初旬、深圳 **CDC** は、深圳市がインフルエンザの流行期にあり、深圳のインフルエンザリスクは「中レベル」だと発表した。深圳市第三人民医院の感染症科で副主任醫師として勤務している李曉鶴醫師は、明らかな患者受け入れプレッシャーは感じていないという。毎日診察する患者数が増えているにもかかわらず、李曉鶴醫師の勤務時間は延びてはいない。病院の救急外来や小児科、呼吸器科の同僚も通常の勤務リズムを維持しており、深圳唯一の国家感染症臨床医学研究センターは、病気のピークを順調かつ秩序正しく乗り越えている。第三病院は前回の **2023 年 5 月**におけるインフルエンザ多発期や **10 月**のマイコプラズマ肺炎多発期間中もこのように「慌てず騒がず」の時を過ごしたとみられる。

李曉鶴醫師は鳳凰網健康に対し、何年も前から同病院は感染症発生に対処するための訓練と準備システムを構築していたと語った。この制度は通年で運用されており、毎年 **11 月**、病院では冬から春にかけて呼吸器感染症の予防管理に関するトレーニングを開始しており、防護のための資材も通年分を保管している。「突然の感染症や病気のピークに遭遇したときには、速やかにスタッフの増員や診療室を増やし、予備醫師や二線級醫師、三線級醫師を次々と補充して、感染症科や小児呼吸器科、救急外来が相互にサポートし合い、検査試験や画像診断の同僚もすぐに到着するため……病気のピーク期であっても、誰もが定時で仕事を終えることができます。他の資格のある同僚が引き継いでくれるからです。」

安定的で秩序あるリザーブシステムは、深圳第三病院に各種疾病のピークに対処する「自信」を与えている。データによると、**2019 年 12 月**に新型コロナウイルスの流行が勃発した武漢で原因不明の肺炎が観察された際、第三病院は **2020 年 1 月 2 日**にスタッフ全員によるトレーニングを開始し、**8 日**には実践的訓練を実施したことが示されている。**1 月 11 日**に最初の陽性患者が出てくるまでに、病院の準備は完全に整っていた。

「病院では毎年、従業員に対する無料のインフルエンザ予防接種も行っています。これまでは、感染症病棟や集中治療病棟、発熱外来等の医療単位などの主要部門のワクチン接種に重点が置かれていました。現在は、医療スタッフや物流スタッフ、看護スタッフなどを含む病院全体がワクチン接種を受けています。」李曉鶴醫師は鳳凰網健康に対し、一部の医療部門とも連絡を取っており、病気のピーク期には誰もが困難や困難に直面することを知っていると補足した。実際的な観点から、**迅速診断の機器装備に重点を置き、積極的に専門家の予備部隊、特に識別と処置ができる発熱クリニックや救急部門の職員を訓練することが、病院が順調に「ピークを乗り越える」ようにすることが特に重要なのだ。**

「感染症発症のピークに対処することは私たちの日常業務の一部となっており、新たな感情はそれほど多くありません。ただ、最近の診察中には依然としていくつかの変化が見られます。現在では、多くの患者が外来に来て、症状や詳細、接触歴を自主的に説明し、マイコプラズマ肺炎なのかインフルエンザなのかを医師に考慮するよう促しています……国民の呼吸器感染症に対する理解が本当に向上してきました。病気が襲ってくる日々を私たちが一緒に過ごすことは私たちにとって貴重です。」

著者： 董蕊
編集： 郭妍

<https://health.ifeng.com/c/8WqOPpUEtBL>

Over the Peak: Medical Care and Hospitals Under the Impact of Respiratory Diseases

Ifeng.com

health.ifeng.com 2024-02-02

11:39:29 Source: Beijing

“There are more than 20 patients here, how can you get off work?”

At 11 o'clock on a winter night, in Jiangbei Campus of Zhongda Hospital Affiliated to Southeast University, emergency doctor Fan Zhiwei was stuck on his way to get off work. The person blocking him was an elderly patient. The old man didn't know that Fan Zhiwei was working the day shift that day and had already worked overtime from 8 a.m. to 11 p.m. At this time, Fan Zhiwei had to eat and sleep as soon as possible, because there was still a day shift waiting for him the next day.

After some explanation, the old man "let go" of Fan Zhiwei. However, such anxiety and incomprehension have appeared frequently in Fan Zhiwei's clinic in the past six months. Since September 2023, respiratory diseases such as mycoplasma pneumonia, influenza A, influenza B, RS virus, and new coronavirus have struck, and hospitals and patients in various places have experienced one infection peak after another. Looking back on this experience of "passing the peak", we can see that there are both ways of coping that medical staff have explored and accumulated, and there are also detailed issues that need more attention. Ifeng.com Health exclusively interviewed frontline experts from emergency departments, pediatrics, respiratory and infectious departments in many places to provide interpretations.

“Around September 2023, a colleague around me was infected with pneumonia. We soon realized that this was mycoplasma pneumonia. This wave of infections came violently, reaching its peak from the end of October to mid-November, and then the incidence dropped, and then the flu came again. Our workload has increased dramatically in the past few months by 3-5 times.”

Fan Zhiwei told ifeng.com Health that during the "over-peak" period, he had to treat up to about 150 people a day, and saw one person every five minutes on average. “If you work the day shift, you usually have to work overtime until night. As we sit there, we feel like we are seeing more and more patients, and we will never finish them.”

Though the number of patients was not small, the processing pressure was not great. Because when compared with the COVID-19 prevention and control in 2020-2022, the workload has been reduced greatly. In addition, mycoplasma pneumonia infection and influenza have fewer severe cases and are not difficult to deal with. For Fan Zhiwei, the pressure to deal with the flu peak in 2023 is even less stressful than in 2018. “There was a very popular article that year called “Beijing’s Middle Ages Under the Influenza.” At that time, oseltamivir was out of stock everywhere, and a friend from Yangzhou drove to Nanjing overnight to find me to buy it. But I also had to queue up here, and even after waiting in line for a long time, there was nothing.”

However, this time after the peak, Fan Zhiwei's psychological feeling was worse than in 2018, because patients in his emergency department quarreled almost every day. “It’s either with the doctors or nurses, or with the patients. Some people seem to be particularly anxious about infection now, and the level of panic is higher than before. They always feel that they are the most serious and must get the fastest treatment, which will easily lead to conflicts and disputes. There are also many patients with the flu in 2018, but everyone treats it as a cold and fever, and is much calmer.”

Fan Zhiwei analyzed to "ifeng.com Health" that on the one hand, this reflects the patient's anxiety; on the other hand, it also reflects that the number of emergency personnel is indeed insufficient. It has been reported by the media that the shortage of emergency doctors in Shanghai is as high as 1/3. In underdeveloped areas, there is an even greater shortage of emergency doctors. Fan Zhiwei added that in order to improve the medical experience, each hospital should optimize the process within its capabilities and make good use of Internet tools to help patients reduce waiting time.

“Of course, there are still many people who don’t understand the role of emergency care. Is the emergency situation urgent, is the condition critical, life is critical, or is the mood urgent and time urgent? Many people don't think about this issue.”

If the key word for the peak of emergency departments is "anxiety", then perhaps the key word for pediatrics is "explosion". During the epidemic stage of mycoplasma pneumonia and influenza in 2023, there will be an explosion of children, parents will be extremely anxious, and medical staff will be extremely busy.

Take the Pediatrics Department of Tongji Hospital Affiliated to Tongji Medical College of Huazhong University of Science and Technology, the flagship pediatric hospital in Central China, as an example. The daily outpatient volume of this department is about 2,500. However, during the influenza epidemic stage in March 2023 and the Mycoplasma pneumoniae epidemic stage in the second half of the year, the number of people suddenly rose to more than 3,600, a surge of nearly 50%.

“It is normal for a doctor to treat 120 children in one work unit. Many colleagues continue to work intensively from 8 am to 6 pm, and also work overtime at part-time clinics from 6 pm to 9 pm. Instead, they cannot take care of their children's illnesses and leave them to their families to deal with.” Luo Xiaoping, director of the Department of Pediatrics at Tongji Hospital Affiliated to Tongji Medical College of Huazhong University of Science and Technology and president of Tongji Children's Hospital, told ifeng.com Health that during periods of high incidence of respiratory diseases, the department will open additional general outpatient clinics, part-time outpatient clinics, night and weekend specialist outpatient clinics, and pediatric respiratory system specialist outpatient clinics. At the same time, we will increase the number of emergency and general clinic doctors, actively promote online consultations on the Internet, encourage parents to use mobile phones to self-service billing, etc., to reduce queues and shorten waiting times for medical treatment. With these multi-measure diversion methods, Tongji Pediatrics' emergency department has improved significantly in 2023 compared with previous years. There is no such thing as "queuing for more than 12 hours" in the past. Even for night emergency services during the peak hours, the average waiting time is only 1-2 hours. However, there is a real shortage of pediatricians during the entire "passing peak" period, which has become the most important factor restricting the rapid "passing of peak" of this department.

Luo Xiaoping said that the overall salary of pediatricians is low, and child patients cannot express themselves correctly. The admission process and physical examination process are cumbersome and complicated, coupled with the anxiety and communication difficulties of some parents, doctors are under great mental and physical pressure during working hours. Therefore, pediatrics is not attractive to talents and it is difficult to retain talents.

In the medical industry, the “pediatrician shortage” is nothing new. Data from the National Bureau of Statistics show that the number of pediatricians in my country will be 226,000 in 2022, and the number of children aged 0-14 will be 239 million during the same period, which is equivalent to only one pediatrician for every 1,000 children. At the same time, more and more medical students are hesitant about pediatrics. “The 2022 survey shows that in the ranking of popularity among medical majors' college entrance examination applications, clinical medicine topped the list with a popularity value of 6.487 million, while pediatrics ranked at the bottom with a popularity value of 269,000.”

Luo Xiaoping said that the outbreak of respiratory diseases in 2023 will make many people pay attention to the hard work of pediatrics again. But for well-trained pediatricians, which is actually the norm at work. There will be peaks of various diseases every year, including adenovirus, influenza, rotavirus, RSV, etc., it is normal for pediatricians to welcome the peak of diseases. "Crossing the peak" is not difficult. It can be over after a few extra shifts. “We also hope that parents and society can give pediatricians more understanding and patience. We don't feel tired from working overtime, but are moved to tears by parents' hard work and concern.”

Luo Xiaoping suggested that seasonal epidemics will come again, and management agencies should increase policy preferences, ensure the salary and benefits of pediatric medical staff, and attract more outstanding talents to join and engage in pediatrics; at the same time, we will increase the pediatric ability training of grassroots doctors to share the pressure of visiting general hospitals.

“A bronchoscopy has just been completed. The mother of the child we treated tonight is also treating other children in the pediatric intensive care unit.” At around 9 pm on November 14, 2023, Mou Xiangdong, director of the Respiratory and Critical Care Department of Tsinghua Chang Gung Memorial Hospital in Beijing, posted to his friends. Since the outbreak of mycoplasma pneumonia in October, performing a bronchoalveolar lavage surgery at 9 or even 10 o'clock every night has become the daily routine for him and his team. From time to time, Mou Xiangdong couldn't help but sigh in the circle of friends: “There are too many bronchial pneumonias!”

Respiratory diseases are highly prevalent in clusters, with emergency departments and pediatric departments bearing the brunt, followed closely by respiratory departments and infectious diseases departments, becoming the backbone of frontline and emergency care for severe cases. “In July 2023, our outpatient volume was still at 4,900, and in October it reached 5,600, and then in November and December it was running at a high level of around 6,500. As the number of patients increases, our working hours have also been extended. We basically finish the outpatient clinic in the morning at 1:30 in the afternoon, and then we have to do 6-7 alveolar lavages, plus deal with the affairs of the ward. It is after 10 pm when we leave the hospital.”

Mou Xiangdong told ifeng.com Health that neither mycoplasma pneumonia nor A-B influenza is new to the industry. The medical team, which has withstood the test of the COVID-19 epidemic, is not under great pressure to deal with this type of disease. As an important force in severe treatment, the respiratory department needs to provide medical support with more professional knowledge and skills. “For example, mycoplasma pneumonia, which has become the focus recently, is characterized by the susceptibility of young children and relatively severe symptoms. In addition, the effectiveness of drug treatment due to drug resistance is limited. Severely ill children may accidentally develop complications such as plastic bronchitis, bronchiectasis, atelectasis, large-area lung consolidation and necrosis, which may be life-threatening in severe cases. For such children, bronchoalveolar lavage treatment, commonly known as ‘lung washing’, is very effective. Tsinghua Chang Gung Memorial Hospital has developed general anesthesia lavage based on the popular "bronchoalveolar lavage under semi-anesthesia" method. The irrigation effect is good, the patient's cooperation is high, and the treatment effect is very good. The disease is fierce. Rather than focusing on the hard work of medical care, we are more willing to use technology

and disease to help patients win this battle.”

As early as the end of October 2023, Mou Xiangdong proposed the "Concise Clinical Recommendations for Bronchoalveolar Lavage in the Treatment of Severe Mycoplasma Pneumonia in Children", the "bronchoalveolar lavage under general anesthesia" method developed by him has also become an important support for the treatment of severe mycoplasma pneumonia in children in Beijing.

In early December 2023, the Shenzhen CDC announced that Shenzhen was in the influenza epidemic period, and the risk level of Shenzhen influenza was "medium." Li Xiaohe, deputy chief physician of the Department of Infectious Diseases, who works at Shenzhen Third People's Hospital, does not feel any obvious pressure to receive patients. In addition to the increase in the number of patients he sees every day, Li Xiaohe's working hours have not been extended. Colleagues in the hospital's emergency department, pediatrics department, and respiratory department also maintained their usual work rhythm—Shenzhen's only national clinical research center for infectious diseases passed the peak of the disease smoothly and orderly. It is understood that the third hospital also spent the previous high-incidence period of influenza in May 2023 and the high-incidence period of mycoplasma pneumonia in October in this way "unhurriedly".

Li Xiaohe told ifeng.com Health that many years ago, the hospital formed a training and preparation system to deal with the occurrence of infectious diseases. This system operates all year round. In November every year, the hospital starts training on the prevention and control of respiratory infectious diseases in winter and spring, and protective materials are also stored all year round. "When encountering sudden infectious diseases or even disease peaks, we will quickly increase staff, open more clinics, and gradually add reserve doctors, second-line doctors, and third-line doctors, the infection, pediatric respiratory, and emergency departments support each other, and colleagues in testing and imaging will quickly arrive... Even at the peak of the disease, everyone can get off work on time. This is because other qualified colleagues will take"

The stable and orderly reserve system gives Shenzhen Third Hospital the "confidence" to cope with the peak of various diseases. Data show that when the new crown epidemic broke out, pneumonia of unknown origin in Wuhan was observed in December 2019. The third hospital started full-staff training on January 2, 2020, and conducted a practical drill on the 8th. By the time the first positive patient arrived on January 11, the hospital was fully ready.

"The hospital also provides free flu vaccinations to employees every year. In the past, the emphasis was on vaccination in key departments, such as infectious disease wards, intensive care wards, fever clinics and other unit medical care units. Now the entire hospital, including medical staff, logistics staff, nursing staff, etc., are vaccinated. Li Xiaohe added to Phoenix Health that he has also communicated with some medical units and knows that everyone faces difficulties and hardships during the peak period of the disease." From a practical perspective, it is particularly important for the hospital to successfully "pass the peak" by focusing on equipping rapid testing equipment and actively training a reserve echelon of professionals, especially the fever clinic and emergency department personnel who can complete the identification and treatment of infectious diseases.

"It should be said that dealing with the peak incidence of infectious diseases has become part of our daily work, and there will not be many new feelings. However, some changes can still be seen in recent consultations. Now many patients will take the initiative to describe symptoms, details and contact history when they arrive at the outpatient clinic, and will also remind doctors to consider whether it is mycoplasma pneumonia or influenza... The public's understanding of respiratory infectious diseases has really improved a lot. It is valuable for us to go through the days when the disease strikes together."

Writer: Dong Rui
Editor: Guo Yan

..... 以下是中国語原文

过峰：呼吸道疾病冲击下的医护与医院

凤凰网健康 health.ifeng.com 2024-02-02 11:39:29 来源：北京市

“这里还有 20 多个病人，你怎么可以下班？”

冬夜 11 点，东南大学附属中大医院江北院区，急诊医生范志伟被堵在了下班路上。堵住他的是一位老年患者。老人不知道范志伟当天的是白班，已经从早上 8 点加班到了夜里 11 点。这时的范志伟得尽快吃饭、睡觉，因为第二天等着他的还有一个白班。

一番解释后，老人给范志伟“放了行”。但是这样的焦虑和不理解，近半年在范志伟的诊室频频出现。2023 年 9 月以来，支原体肺炎、甲流、乙流、合胞病毒、新冠肺炎等呼吸道疾病组团来袭，各地医院与患者一起度过了一个

又一个感染高峰。回看这段“过峰”经历，既有医务人员摸索累积的应对之道，也有亟待更多关注的细节问题。凤凰网健康专访多地急诊、儿科、呼吸、感染科室的一线专家带来解读。

“2023年9月前后，身边就有同事感染肺炎。很快我们反应过来，这就是支原体肺炎。这波感染来势汹汹，大概在10月底至11月中旬到达波峰，随后发病下降，紧接着流感又来了。这几个月我们的工作量暴涨了3-5倍。”

范志伟告诉凤凰网健康，“过峰”期间自己一天最多要接诊150人左右，平均5分钟看1个人。“如果上白班，一般都要加班到夜里。我们坐在那里，会觉得患者越看越多，永远也看不完。”

患者量不小，处理压力却并不大。因为和2020年-2022年的新冠病毒防治相比，工作量已经减少很多。此外，支原体肺炎感染和流感的重症病例较少，处理起来也不算棘手。对于范志伟来说，2023年流感高峰的应对压力甚至不如2018年。“那年有篇很火的文章叫《流感下的北京中年》。当时奥司他韦到处断货，有扬州的朋友连夜开车到南京来找我买。但我这边也要排队开，排了好久也是没有。”

但是这次过峰，范志伟的心理感受却比2018年差，因为他所在的急诊几乎每天都有患者吵架。“不是和医护吵，就是患者之间吵。现在一些人对于感染似乎特别焦虑，恐慌程度也比以前高。总觉得自己最严重，一定要得到最快的治疗，就容易产生矛盾和纠纷。2018年流感的患者也不少，但是大家就把它当作感冒和发烧，情绪要平和很多。”

范志伟向凤凰网健康分析，一方面，这反映出患者的焦虑心理；另一方面，也反映了急诊人员的数量确实不足。曾有媒体报道，上海地区的急诊医生缺口高达1/3。而在不发达地区，急诊医生更缺。范志伟补充，要想提升就医感受，各家医院应该在能力范围之内做好流程优化，还要利用好互联网工具，帮助患者减少等待的时间。

“当然，还有很多人对于急诊的作用并不理解。急诊的急，到底是病情危急、生命危急，还是心情急、时间急？很多人不去思考这个问题。”

如果说急诊科过峰的关键词是“焦虑”，那么儿科或许就是“爆炸”。2023年支原体肺炎及流感流行阶段，患儿多到爆炸，家长急到爆炸，医护忙到爆炸。

以华中地区的儿科旗舰、华中科技大学同济医学院附属同济医院儿科为例，该科日门诊量常态约在2500人次，但在2023年3月流感流行阶段和下半年肺炎支原体流行阶段就骤然升到了3600人次以上，激增近50%。

“一位医生一个工作单元接诊120个孩子是常态。很多同事连续保持早上8点到晚上6点的高强度工作，还要加班晚上6点至9点的业余门诊，自己孩子的生病反而顾不上，丢给家属处理。”华中科技大学同济医学院附属同济医院儿科学系主任、同济儿童医院院长罗小平告诉凤凰网健康，在呼吸道疾病高发时期，科室会增开普通门诊、业余门诊、夜间及周末专家门诊、儿童呼吸系统专科门诊，同时增加急诊和普诊医生，积极推广互联网在线问诊，促进家长运用手机自助开单等等，减少排队，缩短就诊等待时间。有了这些多举措分流方法，同济儿科2023年急诊较往年有明显好转，并没有以往“排队12小时以上”情况，哪怕是最高峰时段的夜间急诊，平均等待时间也只有1-2小时。但整个“过峰”期间儿科医生实在紧缺，这也成为制约该科快速“过峰”的最重要因素。

罗小平介绍，儿科医生整体待遇低，而且儿童患者无法正确表达，接诊过程和体检过程繁琐复杂，再加上部分家长情绪焦虑、沟通困难，导致医生工作时间精神压力和身体压力都非常大，因此儿科对人才的吸引力差，很难留下人才。

在医疗行业里，“儿科医生荒”早已不算新鲜事。国家统计局数据显示，2022年我国儿科医师数量为22.6万人，同时期0-14岁儿童数量为2.39亿，相当于每1000个孩子只有1位儿科医生。与此同时，越来越多的医学生对儿科产生了犹豫。“2022年的调查显示，医学专业高考志愿填报人气排序中，临床医学以648.7万的人气值高居榜首，儿科则以26.9万的人气值垫底。”

罗小平坦言，2023年呼吸道疾病的集中到来，让很多人再次关注到儿科的辛苦。但是对于训练有素的儿科人来说，这其实是工作的常态，每年都会有各类疾病高峰，包括腺病毒、流感、轮状病毒、RSV等等，迎接疾病高峰是儿科医生的常态，“过峰”也不是什么难事，加几个班就过去了。“我们更期待家长和社会能够给予儿科医生更多的理解和耐心。我们并不觉得加班很累，反而会被家长的一句辛苦、一点关心触动落泪。”

罗小平建议，季节性流行病还会到来，管理机构应该加大政策倾斜，落实保障儿科医务人员薪酬待遇，吸引更多优秀人才加入儿科、从事儿科；同时加大基层医生儿科能力培训，分担综合医院就诊压力。

“刚刚完成一例气管镜。我们今晚救治的小朋友妈妈，还在儿科监护室救治其他患儿。”2023年11月14日晚上9点多，北京清华长庚医院呼吸与危重症科主任牟向东发布了一条朋友圈。自10月支原体肺炎爆发以来，每晚9点甚至10点再做一台支气管肺泡灌洗手术，就成了他和团队的生活常态。时不时地，牟向东还忍不住在朋友圈感叹：“支气管肺炎真多啊！”

呼吸道疾病抱团高发，急诊、儿科首当其冲，呼吸科、感染科紧随其后，成为支援一线加兜底重症救治的中坚力量。“2023年7月，我们的门诊量还在4900，10月份就到了5600，之后的11月份、12月份都在6500左右高位运行。随着患者数量的增加，我们的工作时间也延长了，基本都是下午一点半才结束上午的门诊，接着还要再做6-7个肺泡灌洗，外加处理下病房的事情，走出医院就是晚上10点多了。”

牟向东告诉凤凰网健康，无论是支原体肺炎还是甲乙流，对于业界都不是新事物。经受过新冠疫情考验的医护队伍，应对这类疾病并无太大压力。只是作为重症治疗的重要力量，呼吸科需要以更加专业的认知和技能做好医疗支持。“比如近期成为焦点的支原体肺炎，它的特点就是低龄儿童易感且症状相对较重，再加上耐药导致的药物治疗效果有限，重症患儿一不小心就会发展出塑形性支气管炎、支气管扩张、肺不张、大面积肺实变和坏死等并发症，严重的会危及生命。对于这类患儿，支气管肺泡灌洗治疗也就是俗称的‘洗肺’效果很好。清华长庚呼吸科就在通行的“半麻下的支气管肺泡灌洗”方法上发展出了全麻灌洗，冲洗效果好、患儿配合度也高，治疗效果非常好。疾病凶猛，相较于关注医护的辛苦，我们更愿意用技术和疾病硬碰硬，帮助患者打赢这场仗。”

早在2023年10月底，牟向东就提出了《支气管肺泡灌洗治疗儿童重症支原体肺炎简明临床建议》，由其发展出的“全麻下的支气管肺泡灌洗”方法，也已成为北京地区儿童支原体肺炎重症治疗的重要支持。

2023年12月初，深圳疾控宣布深圳处于流感流行期，深圳流感的风险等级为“中”。在深圳市第三人民医院上班的感染科副主任医师李晓鹤，却没有感受到明显的接诊压力。除了每天要看的患者有所增多，李晓鹤工作的时间并没有延长。医院急诊、儿科、呼吸科的同事也都保持着既往的工作节奏——这个深圳唯一的国家感染性疾病临床医学研究中心，就这样平稳有序地度过了疾病高峰。据了解，此前2023年5月的流感高发期和10月的支原体肺炎高发期，三院也是这样“不慌不忙”度过的。

李晓鹤告诉凤凰网健康，多年前，医院就形成了一套应对传染病发生的培训和备班制度。这套制度常年运行，每年11月，医院都会启动冬春季呼吸道传染病的防控培训，防护物资也是常年储备。“遇到突发传染病乃至疾病高峰，我们会迅速增加人员、增开诊室，陆续补充备班医生、二线医生、三线医生，感染、儿科呼吸、急诊科室互相支援，检验、影像同事也会迅速到位……哪怕在疾病高峰期，大家也能按时下班。因为会有其他培训合格的同事来接班。”

稳健有序的储备制度给了深圳三院应对各类疾病高峰的“底气”。资料显示，新冠疫情暴发时，2019年12月观测到武汉不明原因肺炎动态，2020年1月2日三院就开启了全员培训，8日就进行了实战演练。等到1月11日首例阳性患者到来时，医院已经全面就绪。

“医院每年还会为员工免费接种流感疫苗。过去强调是在重点科室接种，比如传染病病区、重症监护病区、发热门诊等单元医护。现在是医院全体，包括医护人员、后勤人员、护工等等都接种。”李晓鹤向凤凰网健康补充，自己也和一些医疗单位做过交流，知道大家在疾病高峰时期都不乏艰难与辛苦。从实操角度讲，重点配备快速检测设备，积极培训储备专业人员梯队，尤其是能够完成传染病识别处置的发热门诊、急诊人员队伍，对于医院顺利“过峰”来说特别重要。

“应该说，应对传染性疾病发病高峰，已经成为我们日常工作的一部分，不会有太多新鲜感受。但是在最近的接诊中，还是能看到一些变化。现在很多患者到了门诊，都会主动描述症状、细节和接触史，还会提醒医生考虑是不是支原体肺炎、是不是流感……大众对于呼吸道传染病的认知，真的有了很大提升。我们一起走过疾病冲击的日子，是有价值的。”

作者：董蕊
编辑：郭妍